

日本語教師養成シリーズ

音声,語彙,文字・表記

監修 佐治圭三・真田信治



とうほう
東京法令出版

音声、語彙、文字・表記

江苏工业学院图书馆
藏书章

(ふじい としひろ)

1960年、兵庫県生まれ。同志社大学を卒業後、1987年龍谷大学大学院博士課程を単位取得退学。1987年から京都橘女子大学・龍谷大学非常勤講師。1988年から同志社大学非常勤講師、1989年に京都橘女子大学専任講師。1987年同志社大学では留学生に「日本語」を担当。1993年から大阪学院大学非常勤講師。現在、同志社大学教授。専攻は語彙論・文体論。

〔主な著書〕

『日本文章表現史』（共著 和泉書院）

日本語教師養成シリーズ 音声、語彙、文字・表記

1996年4月1日 初版1刷発行
1999年8月30日 初版3刷発行

監修／佐治圭三
真田信治
著者／王伸子
大島中正
鹿島央
玉村禎郎
藤井俊博
発行者／星沢哲也

発行所  **東京法令出版**

〒112-0002 東京都文京区小石川5丁目17番3号
電話 03(5803)3304

発売元 **株式会社 凡人社**

〒102-0093 東京都千代田区平河町1丁目3番地13号
菱進平河町ビル1階
電話 03(3263)3959

© TOKYOHOREISYUPPAN CO., LTD. 1996

・本書の全部又は一部の複写、複製及び磁気又は光記録媒体への入力等は著作権法上での例外を除き、禁じられています。これらの許諾については、当社までご照会ください。

・落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-8090-6125-6 C3037

まえがき

日本語教師の要件の一つとして、的確な言語感覚、日本語を客観的に
見ることのできる能力、といったものが求められよう。そのような能力
を養うにはさまざまな方法があるだろうが、最も大切なことは、自分自身の
日々のことばづかいに鋭い感受性を持つこと、ではないだろうか。こと
ばを愛する人、日本語にたいして限りない好奇心を抱いている人にこそ
日本語教師になってほしいものである。

日本語研究の分野でも日本語教育の分野でも、新しい方法がつぎつぎ
に開拓されつつある。相次いで発表される研究を総括して解説すること
は大変むずかしくなっている。が、このシリーズでは、各巻で、今
の段階でのできるかぎりの総合的な記述を試みたつもりである。日本
語の研究・教育に関する問題をことごとく論説しつくしているとはいえ
ないまでも、かなり多くの重要な問題は、現在の日本語学・日本語教育
学の水準で取り上げていると信じている。それぞれを各自の日本語の知
識に照らして批判的に読んでほしいと思う。そうでなくては、日本語教
師として必要な言語感覚を得ることも、また、得た知識をその場に合わ
せて創造的に応用することもできないと考えるからである。

このシリーズは、日本語教師養成講座におけるテキストとして、また、
大学での日本語学、日本語教師養成コースのテキストとして、あるいは
日本語教師を目指す人の自習用参考書として編まれたものである。各巻
の記述内容は、特に「日本語教育能力検定試験」に挑戦しようとする人
たちにとって、大いに役立つものとなっているはずである。その方面に
寄与することができれば、また、そのために、全巻にわたって積極的に
活用していただければ、幸いである。

佐治 圭三
真田 信治

目 次

まえがき

音 声

はじめに	(鹿島 央) ... 3
第1章 音声概論	(鹿島 央) ... 4
1. 音声の定義と分類	4
2. 音声の一般的性質	5
3. 音声の重要性	5
4. 音声生成のメカニズム	5
5. 音声器官	6
6. 音声学とは	9
7. 音声学と日本語教育	10
第2章 音声のレベルと音韻	(鹿島 央) ... 12
1. 分節と韻律のレベル	12
2. 音韻	13
3. 音声表記	15
第3章 単音レベル	(王 伸子) ... 16
母音と子音——それぞれの役目	16
1. 母音	16
2. 子音	26
第4章 韻律レベル	(鹿島 央) ... 53
1. リズム	53
2. アクセント	57
3. イントネーション	64
4. ポーズ(息の区切り)	70
5. プロミネンスとフォーカス	71
6. 学習者の韻律レベル上の問題点	73
第5章 音声教育の問題点	(鹿島 央) ... 78
1. 音声指導の問題点	78
2. 音声教育の方法	79
おわりに	(鹿島 央) ... 81

語 彙

第1章 基本語彙と基礎語彙	(藤井 俊博) …85
1. 語彙とは	…85
2. 語彙の計量	…86
3. 基本語彙と基礎語彙	…89
第2章 語彙の類別	(藤井 俊博) …90
1. 語種による類別	…90
2. 位相による類別	…97
3. 使用者による類別	…97
4. 場面による類別	…98
5. 文法的機能による類別	…99
6. 音声的特徴による類別	…100
7. 擬音語・擬態語	…101
練習問題	…104
第3章 語 義	(玉村 禎郎) …105
1. 語義と指示対象	…105
2. 意義素と意味特徴	…106
3. 類義語と対義語	…107
4. 語義変化	…108
第4章 語構成	(玉村 禎郎) …109
1. 語構成・語構造・語形成	…109
2. 語構成と語の種類	…110
3. 単純語	…112
4. 合成語	…112
第5章 語彙史	(玉村 禎郎) …120
1. 語彙史概説	…120
2. 時代別に見た語彙	…121
第6章 辞 書	(玉村 禎郎) …124
研究課題	…127

文字・表記

(大島 中正)

第1章 表記体系	…131
1. 表記とは	…131
2. 文字と文字体系	…133
3. 文字の形	…137
4. 文字体系の分類	…141

5. 現代日本語の表記体系	149
第2章 日本語とその正書法	152
1. 音韻と文字・表記	152
2. 単語の表記	154
3. 文の表記	158
4. 漢字制限	159
第3章 資料	163
資料1 現代仮名遣い	163
資料2 送り仮名の付け方	174
資料3 国語審議会答申 常用漢字表 前文	184
資料4 常用漢字表	190
資料5 外来語の表記	201
資料6 ローマ字のつづり方	210
資料7 くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)	212
資料8 くりかへし符号の使ひ方〔をどり字法〕(案)	224
参考文献	229

音

声

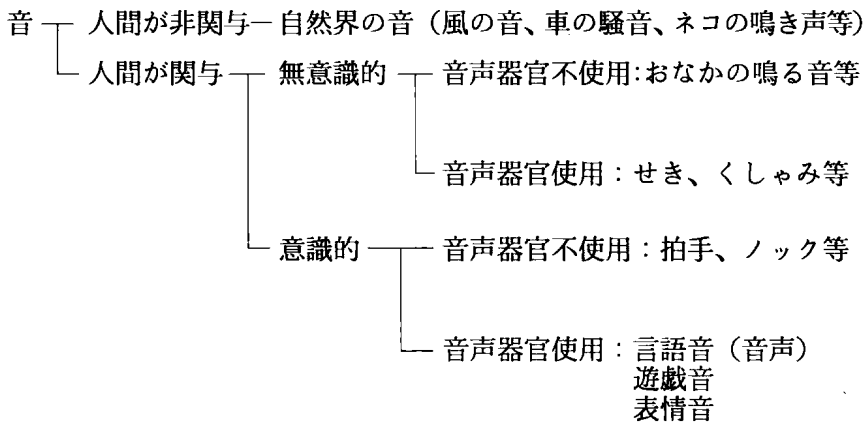
はじめに

世界には様々な言語があるが、どんな言語が母語であれ、人は口で何か音をつくりだしてコミュニケーションの手段としている。この口から出てくる音の連続が、いわゆる話しことばを形づくる。話しことばというのは書きことばとは異なり、ふつう、ことばの話されている社会に生まれ、生活していれば自然に習得されていくものである。これに対して、書きことばは、これを持たない社会集団があったり、識字率が問題となったりすることからも明らかなように、教育の中で覚えさせなければならないものである。ことばとは本来、音でできたものである。わたしたちが外国語を話すときはもちろん、学習者が日本語を話すときも、まずは音に注意がいく。なぜこの音はうまく発音できないのか、どこがどう母語話者と違っているのか、どうすればうまく発音できるようになるのか、などである。ところが、いざ自分がつくりだしている音、あるいは相手につくりだされている音を客観的に分析しようとする、一体どこから何を手がかりに始めればいいのか分からなくなる。このことは、個々の音あるいは音連続が脳からの指令で自動的につくられだされているので、普段は、どこがどうなるとどういう音がつくられるかなどについて、いちいち気にしていないことによるものである。そこで本編では、口でつくられだされる音を客観的に分析するのに必要な基本的な概念について考えていく。同時に、日本語学習者の特徴的な発音全般について観察し、日本語話者との違いについても比較検討する。

第1章 音声概論

1. 音声の定義と分類

わたしたちが口で作りだしている音は、音声あるいは言語音といわれ、外界にある様々な音とはいくつかの点で異なっている。音声は一般的には、「人が、情報を伝えたり、意思の疎通を図るなどのコミュニケーションを目的として、音声器官を使って、意識的に作りだす音」と定義される。このように考えると、音は以下のように分類される。



音声はコミュニケーションのためにつくりだされる音であるので、その一番の役割は意味を区別して伝えることである。したがって作りだされた音声のなかには、この役割をはたすことのできる成分があるはずである。本書では、この成分について考察をすすめていく。一方、せきやあくびなど無意識のうちに出される生理的な音は反射音とよばれるが、これらの音が意識的につかわれたものが表情音である。せきばらいをして“わたしは聞いているよ”という意味を伝えたり、あくびをして“ああ、つまらない”と言いたいときなどがそうである。これらもここでの定義から考えると音声ではあるが、通例にしたがい考察の対象とはしない。なお、音声は簡単に音（おとではなく、おん）といわれることもある。

2. 音声の一般的性質

すべての音についてあてはまることであるが、音声にも以下の四つの共通した性質がある。

- 1) 高さ 2) 大きさ 3) 長さ 4) 音質

たとえば、「あー」というとき、高く言ったり、低く言ったりできるし、ねこが晩御飯のさかなをくわえようとするのを見つければ、「あー」は大きくもなる。また、長くもなるであろう。音質が違うというのは、「あー」は「いー」とはちがうということである。このように、これら四つの性質は、音声の意味の区別をするうえで何か重要な役割をしていることが考えられる。この点については後ほど検討していく。

3. 音声の重要性

音声は意味を伝達するという点でことばにとって第一義的なものであることは、書きことばしかないような社会集団がないことから明白である。もちろんいまでは死語となったラテン語や古典ギリシャ語などは除いてのことである。伝達する内容も、語の意味、文の意味を区別することをはじめとして、話している人の氏、素姓までさまざまな情報を含んでいる。たとえば、性別、年齢、出身地、職業、人柄、精神状態、健康度など、音声にはいっている情報でいとも簡単に分かってしまう。このように不思議な働きをする音声は、いったいどのような仕組みをもっているのかこれから順を追って検討してみる。

4. 音声生成のメカニズム

いったい音声とはどのようにして形作られるものなのか。そのためには、以下の三つの条件が必要である。

- (1) 気流 (airstream)
- (2) 発声 (phonation)
- (3) 調音 (articulation)

考えてみればわれわれは呼吸をして生きているわけであるが、音声は呼気（はく息）を利用して作りだしている。すなわち、まず（1）の条件である肺からの気流がなければならないということである。息を吸いながら（吸気）話すこともないわけではないが、稀である。たとえば、

数を数えていくとき、途中ではく息が足りなくなり息を吸うときに休まず数え続ける場合など、たしかに吸気を使っているようである。音声の中には、肺からの気流だけではなく、口の中を気流の源としたものもある。特になじみのあるのは、舌打音（クリック音）で、日本語ではうまくいかないときなどに舌先で「チェ！」と発音するのに似た反射音をつくる。これは肺が気流の源になっていない例である。つぎに（２）の条件であるが、ふつうに「あいうえお」というのと、ささやきながら「あいうえお」というのでは異なって聞こえる。これは、声帯の状態が二つの場合では違っていることによる。声帯の振動のある場合は、声がある（有声）といい、振動がない場合は声がない（無声）という。このように声を伴ったり、伴わなかったりした呼気が口の中まであがってくるが、これだけではまだ意味の区別をするような音声にはならない。そこで、口の形をさまざまに変えたり、舌や唇をつかって気流をとめたり、摩擦させたり、いろいろな妨害を行い音声をつくる。これが（３）の調音である。以上の三つの生成過程を経て口の外に出てくる。

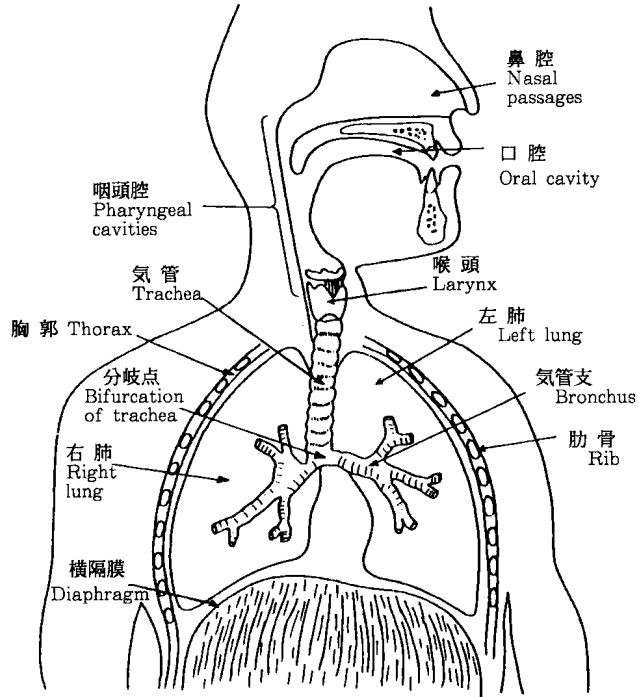
5. 音声器官

音声がつくられるためには、装置が必要であるが、人間にはそれだけのために特別な器官があるわけではない。気流を発声させるための肺は呼吸をするための器官であるし、口は食べ物を咀嚼するためにある。音声はこれらを併用して生成のためにつかっているのである。音声器官は前項の生成のメカニズム（４．－（１）（２）（３））にそって説明する。図１は音声生成にかかわる器官の全体的な図であるが、気流の発生に関係するのは特に肺、横隔膜である。これらの器官は神経、筋肉で他の器官と縦横に結び付けられ、総合的な一大筋肉運動によって気流を生成する。

図２は、発声に関係する器官の図であるが、これは図１の喉頭の内部を喉頭鏡（上図）により拡大して見たものである。

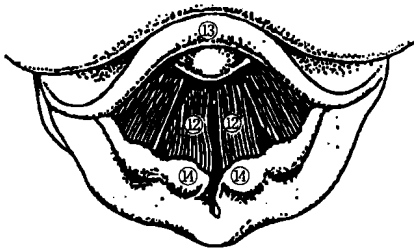
喉頭は三つの軟骨によって構成され、中には声帯とよばれる筋肉の薄いひだがある。この声帯は複雑な動きをして開いたり閉じたりすることで、図３のようないろいろな発声のタイプを形成する。

図４は口腔のなかに入ってきた呼気が調音される器官を表している。



(Tiffany and Carrell:1987, p. 72)

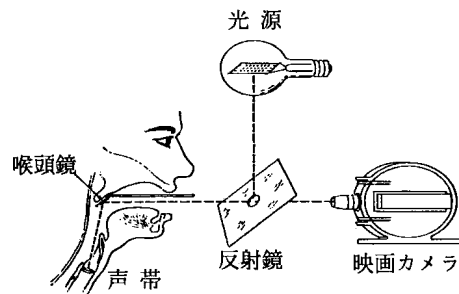
図1 音声器官の全体図



- ⑫声帯 (vocal cords)
- ⑬喉頭蓋 (epiglottis)
- ⑭披裂軟骨 (arytenoid cartilages)

声門とその周辺を喉頭鏡によって見た図。
 上が前方、声門 (glottis) とは、狭義では声帯間の開口部をさすが、広義では披裂軟骨間のそれも含める。その場合は、声帯間の開口部を「筋肉声門」または「靱帯声門」、披裂軟骨間のそれを「軟骨声門」と言う。

声帯の運動を観察記録する方法



(神山・戸塚:1990, p. 50)

(『英語学大系2 音韻論Ⅱ』大修館書店、1971より 一部改変)

図2 喉頭と声帯

声帯の状態

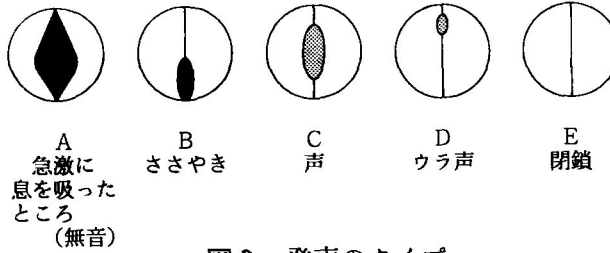
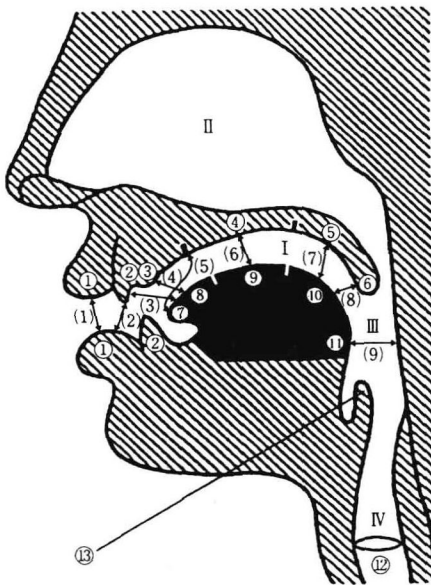


図3 発声のタイプ



- I 口腔 (oral cavity)
 II 鼻腔 (nasal cavity)
 III 咽頭 (pharynx ; pharyngeal cavity)
 IV 喉頭 (larynx)
- ①唇 (lips)
 ②歯 (teeth)
 ③歯茎部 (alveolar ridge)
 ④硬口蓋 (hard palate)
 ⑤軟口蓋 (soft palate) [又は口蓋帆 (velum)]
 ⑥のどひこ [又は懸壺垂 ; 口蓋垂] (uvula)
 ⑦舌尖 (tip of the tongue)
 ⑧前舌部 (front of the tongue)
 ⑨中舌部 (mid of the tongue)
 ⑩後舌部 (back of the tongue)
 ⑪舌根 (root of the tongue)
 ⑫声帯 (vocal cords)
 ⑬喉頭蓋 (epiglottis)
- 調音位置
 (1)両唇 (bilabial)
 (2)唇歯 (labiodental)
 (3)歯 (dental)
 (4)歯茎部 (alveolar)
 (5)そり舌 (retroflex) [又は反転]
 (6) (硬) 口蓋 (palatal)
 (7)軟口蓋 (velar)
 (8)のどひこ (uvular)
 (9)咽頭 (pharyngeal)
- (『英語学大系2 音韻論II』大修館書店、1971より 一部改変)

図4 調音器官

図5は、調音に際して関係してくる口腔の上部と舌の区分を表したものである。

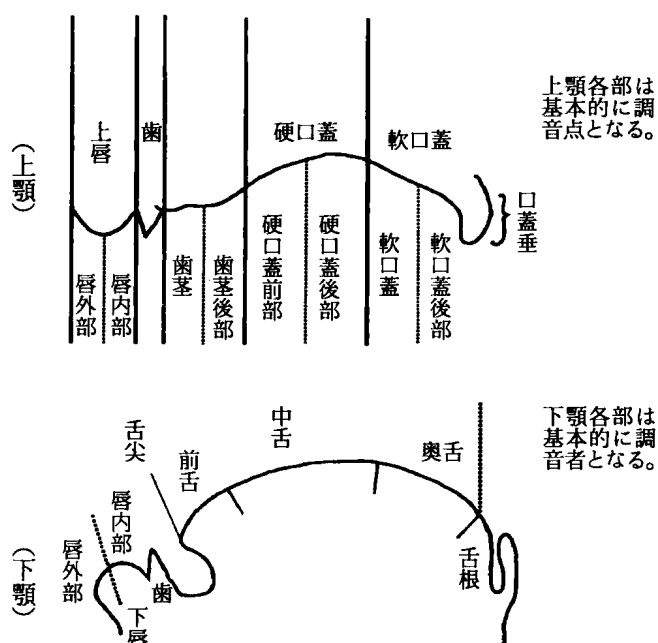


図5 口腔上部と舌の区分

6. 音声学とは

音声というのは、4. で述べた生成のメカニズムを経る一大筋肉運動の結果形作られることが分かった。この音声を研究の対象とする学問領域に音声学がある。音声学には大きく分けて三つの分野があるが、このことを説明するために、図6のように2人の人（A，B）が会話をしているところを考えてみる。

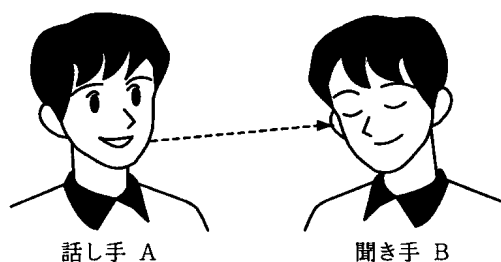


図6 会話の様子

まず話し手であるAは、話す内容を頭の中に思い浮かべ、自分の言語で概念化する。それから中枢神経からの指令によって、音声を生成するために必要な筋肉運動をおこす。このとき話し手は外部から観察すれば、一般的には口が何やら忙しげに動いていることぐらいしか分からない。ここでは、一体どのように音声器官を動かせばどのような音声ができるのかということに興味の中心がある。この分野を調音音声学 (articulatory phonetics) といい、はるか何千年も前の古代インド、ギリシャの時代から行われてきた。この分野でも、舌が口蓋のどこに接触しているか観察できるパラトグラフや呼気の流出量を計測する呼気流量計などの機器がある。このように調音された音声は口から放出され、聞き手の耳に届くことになるが、その途中には空気を媒体とした音波がある。ここでは音声は空気の振動として存在し、物理的な分析対象となる。この分野は音響音声学 (acoustic phonetics) とよばれ、サウンド・スペクトログラフなど種々の測定機器をもちいて分析を行う。最後に、聞き手に届いた音声は鼓膜を振動させることで内耳から聴神経を経て、大脳に到達し、話し手が言った内容が解読される。この分野は聴覚音声学 (auditory phonetics) といわれ、聞き手が聞き取る音声の聞き取り方を考察する。ここでは、外部から直接観察できることはないので、いろいろな音声聞き取りテストをおこない聞き取りの様子を検討する。このような三つの段階を経て、話し手から聞き手へ、また聞き手が今度は話し手となり、音声は生成、伝達され、会話は循環して進んでいく。このことをことばの鎖あるいはスピーチ・チェーン (speech chain) という。

7. 音声学と日本語教育

図7は日本人話者と学習者が会話をしている状況を表しているが、4.の説明のようにここでもことばの鎖が生じている。すなわち、話し手と

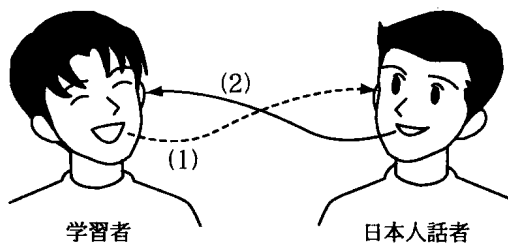


図7 学習者と日本人話者との会話の様子